

高齢者の尊厳大切に

他施設へ広がり期待

「胃ろう」廃止、全員常食

特別養護老人ホーム（特養）で胃に直接流動食を流し込む「胃ろう」など医療的処置が必要な高齢者が増える中、南城市知念の特養「しらゆりの園」（友名孝子理事長）が口から食べる摂食訓練で胃ろうを全廃し、入所者全員が健康な人と同じ食事をしている。入所者の重度化が進む特養で全員が胃ろうや刻み食、ミキサー食でなく、口から常食を食べているのは全国でも例がないという。

特養ホーム「しらゆりの園」



全員が常食を食べている特別養護老人ホーム「しらゆりの園」の昼食風景（南城市知念）

これまでも高齢者の尊厳を守るため、日中おむつゼ口に取り組んできたしらゆりの園で、入所者全員が口から普通食を食べるといふ常食移行の取り組みが始まったのは今年1月。当時、同施設の入所者70人のうち、常食は41人（58.8%）、12人は刻み食、5人はゼリー食、3人はミキサー食、9人は胃ろうだった。職員たちは入所者の口腔アセスメントを実施し、かむ力、水を飲む力などを確認。「人間は使わないと忘れてしまう」という国際医療福祉大学大学院の竹内孝仁教授の理論を実践した。水分が少なくなると意識レベルが下がるので、水分

多く、介護職が専門性を発揮すれば、胃ろうははずせる」とほかの施設に取り組みが広がることを期待した。（玉城江梨子）

摂取量を増やし意識レベルを上げる。その上でするめや棒付きのあめなどで口腔機能を向上させ、かむ回数を増やした。こぼしたり、時間がかかったりするが、次第に普通の食事ができる人が増え、5月22日に全員が口から常食を食べた。仲村渠紀希介護課長は「刻み食や胃ろうの時のより時間がかかることは確か。それでも、目で見て味わい、口から食べる」とが人間として一番大切なのでは」と話す。友名理事長は「胃ろうやミキサー食が当たり前だったが、本当にこれでいいのかという疑問から始まった。もう一度口から食べさせてあげたいという家族は